

ヨハネ福音書のシムポリズム

茂

洋

(本稿は、昭和三十九年八月二十二日六甲山凌雲荘での基督教学校教育同盟関西地区主催
夏期研修会における聖書講義である。)

ヨハネ福音書のシムポリズムについてお話ししようと思います。なぜシムポリズムという主題をえらんだかと申しますと、それは信仰における表現そのものと、その表現が真実に示そうとしているものとの関係について考えてみたかったからです。私達のように基督教主義に奉職している者にとって、とりわけ宗教々にたずさわっている者にとって、日々の礼拝とか宗教行事とか更に又聖書科あるいは宗教科目を担当するときに、たしかに表現上信仰的いや少なくとも基督教的ではあるのですが、果してその表現が、信仰において示そうとしている真実を本当に伝えているかどうかは大問題であります。そしてうっかりすると、基督教的伝統とかマンネリズムにおちいってしまう危険性をもっているのではないでしょうか。「仏作って魂入れず」という言葉がありますけれども、同じような失敗を基督教信仰において、私達が無意識的に、そして時には意識的にさえ、おかしつつあることを深く反省せざるを得ないのです。

さて私達は、私達をこえる世界と関わるものをすべて象徴的に表現しなければならぬのではないのでしょうか。つまり私達の世界内での表現でもって、私達をこえる世界をそのまま表現することは不可能であって、いつも象徴的にしか表現されないのです。しかも私達にとって、そのような象徴的な言葉でもってのみ、私達をこえる世界、永遠の世界を表現することができるのです。たとえば、旧約聖書における神の名前は、つづけては発音不可能の四つの子音

YHWHから成立っており、しかもその語は旧約聖書中に六、八二三回も用いられております*¹。そしてその字がくると、ユダヤ人たちはたえず「主」という意味のアドナイと発音しておりました。するとこの四文字YHWHは全く無意味な字かという、実は丸で逆なのです。このYHWHなる語は、全く発音できないけれども、それはイスラエル民族をエジプトより救い出した神であり、さらにすべてのものを創造したもう神という内容をもっているのです。口では充分表現できないけれども、イスラエル民族をたえず導き、愛し、又その故にさばきを下したもう永遠者が力強く働らいておられることを、私達は旧約聖書を読むときに生き生きと感ぜしめられます。しかも表現そのものは、何とも発音できない語であるというのは、非常に興味深いことだと思ふのです。皆さんは、この発音できない語を無理にこじつけてよんだら、ヤウエ、エホバとなるということを勿論よく御存知であり、しかも口語訳聖書では、その語が、全部アドナイつまり「主」と訳されていることもよく御存知のことと思ひます。

このように、シムボリズムは、信仰にとって不可欠なものでありますけれども、同時に正しくそのシムボリズムのさし示しているものを受取ることが必要となつてきます。人間の経験内でおこりながら、その内容は経験をこえた世界を示すのですから、それを正しく受取ることにはかなりむづかしいことなのです。いまここで、このシムボリズム研究のためにヨハネ福音書を取りあげてみたいと思ひます。と申しますのは、この福音書では表面上記されている物語と、その物語が示そうとしている内容との間のコントラストが、非常に顕著であるからなのです。単なる表面上の理解で終れば、カナでの婚礼の物語（二章）のように、さらに又ベテスダの池のまわりにいた病人の物語（五章）のように、五つのパンと二匹の魚で五千人が満ち満ちた物語（六章）のように、シロアムの池の物語（九章）のように、さらに又ラザロの復活の物語（十一章）のように、奇跡物語にすぎなくなってしまうのです。福音書記者の真意は、奇跡物語をえがくことだったのでしょうか。勿論ちがうはずです。何をこれらの物語は意味しているのでしょうか。もし表面上の意味しか理解出来なければ、結局夜こっそりやってきたニコデモが最後に言ったように「どうして、そん

なことがあり得ましようか」(三・九)といつてすぐ去つて行つてしまわねばならないのではないでしようか。そして、眞実のパンと肉の意味をイエスが示そうとされたとき、「多くの弟子たちは去つていつて」(六・六六)、結局十二弟子しかのこらず、しかもその内の一人がイエスを売つてしまつています。そしてあの棕櫚の聖日に勇んでイエスと共にエルサレムに入つた弟子達が、果してどれ程イエスの出来事の眞実をみる事が出来ていたでしようか。こう考へてくると、この福音書には、單なる歴史主義では把握できない無限の内容が示されているといつてさしつかへないでしよう。そこで、その問題についていよいよ本論にとりかかつて行きます。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

先ず第一に考へたい問題は、「何故ヨハネ福音書記者は、シムボリズムを用いなければならなかつたか」という点です。この問題を解明するために二つの角度からとりくんでみたいのです。その一つは、信仰の内容そのものからで、他の一つはヨハネ福音書の構造からです。

既にのべましたように、ヨハネ福音書記者に限らずどの信仰者も信仰の内容を示すときには、必らずシムボリズムを用いておきます。この点をもう少し深りさげてみたいのです。私はこの事を考へるとき、いつも氷山を思いおこすのです。海にうかぶ氷山は、たしかに目にみえる部分です。しかしその目にみえる部分をささえている海面下の氷山のひろがり、無限ではないにしても、少くとも海面上より大きいはずで、私達は、目にみえる部分で物事を判断します。しかしその事だけでは不十分であることは当然です。目にみえない部分への畏敬の念が必要となつてきます。信仰においては、この二つの關係が最も顯著に對照されるのではないでしようか。「信仰が、たしかに私達の有限な領域内におこるものであることは事實です。しかし現実には、信仰の中心である無制約的なもの、氷遠なるものは、私達の有限な領域を越えているのではないでしようか。私達は、信仰とか無限とか永遠とか神とかずい分容易にこれらの言葉を用います。しかしこれらの言葉でさえ、そのものではあく迄私達の有限な領域内の言葉なのであり、

氷山の水面上の姿にむかって、あたかも全体であるかのように思っているのにすぎないのではないでしょう。ですから、いかなる有形的なものも、たとえそれがどんなに宗教的のものであったとしても、それ自身として直接に無限なるものを表現することは出来ないのです。ですから、神は神自身の名を越えていることをみとめなければならぬのです。^{*2} 私達の信仰的「確信」や「意志」や「感情」が、真実の無制約的なもののかかわりあいの代りになることは出来ないのです。

この点をあきらかに示している書物があります。それはルドルフ・オットーの「聖なるもの」^{*3}です。ここで彼は宗教における聖なるものから、いわゆる道徳的合理的要素をとりのぞいてみると、全く非合理的なもの、つまり私達が言葉でもってはあらわすことの出来ない全く他なるものが残ると主張しています。この事は、先程までのべてきました有限な表現では把握できない深淵さが信仰の中にあることを示しています。先程の例を用いると、信仰における氷山の海面下のひろがり、示されているとあってよいのではないでしょう。

さてこの点をもう一步オットーの説明に従って、深り下げてみましょう。聖なるものから道徳的及び合理的要素をとりのぞいてしまいますと、非合理的なもの、全く他なるものがのこりました。彼は、言葉では充分表現出来ない非合理的なものが、私達の信仰に神秘を与えているのだと説明し、その神秘を *Mysterium fascinans et tremendum* 魅せられたる神秘とおそるべき神秘となづけています。この魅せられたる神秘とおそるべき神秘とは、私達の信仰の源動力ともいえるのではないでしょう。つまり単に無限だ、永遠だというのではなく、私達一人一人の存在が、この無限なるものに極端に恐れをもちながらも、ひき入れられて行くのが、信仰の力なのではないでしょう。人間の心は、こうした無限なものの中にはじめて自己充足を求めるとは出来ないでしょう。私達が無限とか永遠とかを発見するとき、つねに恍惚的な吸引力と魅せられたる力がおこるのは、そのためでしょう。しかし同時にこの無限、永遠とのかわりによりこびを見出せば見出す程、人間が有限なるものであり、その無限なるもの、永遠なるものから

無限にへだたっていることに気付くわけです。

ここで私達は、信仰におけるシムボリズムを考えるとき、これは単に不可欠なものであるというだけでは不充分なことが分ってきました。つまり、信仰におけるシムボルは、私達の存在が、その背後にある無限なるもの、永遠なるものとの魅せられたるそしておそるべき神秘をもつてのかかわりを示しているということです。つまり単にここに有限なる私達があつて、むこうに永遠なる神がある、そしてその両者をつなぎあわせるのに用いられるのがシムボルであるというのでは、内容の豊かさが全く無視されたことになってしまふのです。必要なことは、私達の存在が、その究極的なものと無限のゆたかなかかわりあいをもつときにはじめて、シムボルの意味がみだされるのです。テイリットという神学者は、「信仰は象徴の受容である。そしてその象徴とは、神の行動の姿によるわれわれの究極的な関わり^{*4}の表現である」と言っています。ですから信仰におけるシムボルは、他の方法では捕えられない永遠の次元をさししめずばかりではなく、さらにその次元に対応する私達の靈的な次元をも広め深めるものなのです。従つて信仰におけるシムボルを見るときに、私達は、この次元と異なる永遠の次元を学びとるばかりではなく、その次元に対応する私達自身の存在の隠れた深みを見出すことが出来るのです。ですからこのシムボルを通してでなければ知ることの出来ない次元が、私達の中にあるということがいえるわけです。

「何故ヨハネ福音書記者はシムボリズムを用いねばならなかつたか」というのが現在の私達の課題でした。信仰の内容からの一般的なアプローチをしましたから、今度はヨハネ福音書自体の構造から考えてみることにしましょう。

ヨハネ福音書は、他の福音書とくらべると、歴史的資料のしめる位置よりもその解釈の方が強いといわれます。と申しますのも、この第四福音書が書かれた時期が、一世紀の終りか二世紀のはじめで、場所がエペソといわれておりますので、イエスの歴史的生涯への記録に興味の中心があつたというよりも、むしろその内容の解釈に重きがおかれたのは当然なことでしょう。キリストの十字架上で死後既に六、七十年、そしてパウロも三回の伝道旅行を終え殉

教して三、四十年を経ております。初代教会がいわゆる信仰の中心的内容としての教説（ケリグマ）を固く保持しつつ、教会生活の形式とくに洗礼と聖餐式という宗教的儀式をととのえておりました。^{*5}

又キリスト教的思想以外からの影響も非常に強いものでした。そこにはユダヤ教に保存されていた旧約聖書の伝統とギリシヤの宗教哲学とがその主なるものでした。特にギリシヤ宗教哲学いわゆるヘレニステイックな哲学の影響は随分当時の人たちに強かったようです。ある解説によれば、^{*6}第一世紀においてもプラトンは思想の師であつたばかりではなく、彼の著作をページもよまないものにとつても、プラトンは一種の雰囲気を与えていたのだそうです。特にその思想での特色は、真実の世界は未知であるが永遠の世界であり、肉的な物質的世界よりもつねに優位にあるという点でした。ヨハネ福音書を読むと、このヘレニステイックな思想が実によく消化され、しかも超越されていることに気付きます。後で一つ実例を学ぶことにしましょう。

もう一つヨハネ福音書に影響を与えた哲学があります。それはストア学派です。現実にはどの程度の影響をうけていたかは分りませんが、ヨハネ福音書記者は、ストア学派で一般的に用いられていたロゴスという言葉——実は言と訳されていますが——をそのまま用いながらも豊な内容を与えているのです。つまりストア学派では、ロゴスは神でありしかも宇宙であるという汎神論的な内容をもっていたのにくらべ、ヨハネ福音書記者は、このロゴスは人間を自然に神の子とするものではなく、ロゴスが肉体となつたそのキリストにより人間は真実の生命を得ると解釈しています。これらでお分り下さると思いますが、ヨハネ福音書記者は、キリスト信仰の深淵さでもって、当時かなり一般的だったヘレニステイックな哲学用語を用いながら、それにひきづられることなく、新しい解釈を与えていることに気付くわけです。

実例をあげる前にもう一つのおきたいことがあります。^{*7}それはこの福音書の構造なのです。この福音書は三つの部分にわけられます。その第一は序文にあたる所で、第一章全体です。ここには本文の主題が示されており、その

中心的内容は一章一四節「言が肉体となつた」ということです。この時間、空間において永遠的ロゴスが受肉するということは、信仰者にとって最も深い魅せられたるしかもおそるべき神秘なのでしょう。ギリシヤ哲学的用語を用いながらも、それを越えて、信仰のかかる豊かさをのべている所にヨハネ福音書の特色があるのです。第二の部分は二章から二二章までで、これを「しるしの書」と呼ぶことが出来ます。更に第三は一三章から二〇章までで「受難の書」と呼ばれます。話が前後しますが、この第二の部分にあたる「しるしの書」は、先程のべましたように、単なる歴史的敘述ではなく、キリストとのかかわりあい、キリストを通しての永遠者とのかかわりあいが信仰者にとっての永遠の生命であり光であり、死に勝つ勝利であることがのべられています。これらの物語は、全部キリストを通して示された永遠なるものの究極的なかかわりを示す「しるしの出来事」(二・一一)なのです。どの物語も表面上の肉の秩序でおこってはいますが、もしその範囲内ではかたらえられなければ、ヨハネ福音書の主題である「言が肉となつた」つまり永遠的秩序がこの肉の秩序内におこつたことを見失ってしまうことになるわけです。このヨハネ福音書中のしるしの出来事の組み合せ方は、実におどろく程美しく巧妙なものです。残念ながらその全部を説明する時間がありませんので、その一つだけをとり上げておきたいと思ひます。ニコデモとイエスとの対話(三・一—一五)がそれです。

ニコデモはユダヤ人の立派な学者でありました。彼はイエスの出来事の中に自分達では想像もつかぬ新しいしるしのあることを不思議に思つて、夜こっそりイエスの所へやってきて、イエスにそのおどろきをのべました。するとイエスは、「新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」といって新生を主張されます。ここでニコデモはこの新生を全く誤解してしまつて、「人は年をとつてから生れることがどうしてできましょるか」と反論します。次のイエスの言葉がこの物語解釈の決め手になっていと思ひます。「だれでも、水と霊とか生れなければ、神の国にはいることはできない。肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である」。この「水と霊とかから生れる」とい

うのは、勿論初代教会における洗礼を意味しております。キリストの出来事を心から信じ告白することを意味しています。次に肉と霊とが対比されています。ここにギリシヤ思想の強い影響があると思うのです。つまり当時のギリシヤ思想において、肉と理性との対比は実にあきらかでした。あらゆる存在の低い秩序が肉であり、これは一時的であり消えゆくものなのです。それに対して高い秩序は理性であり、これは永遠的であり不滅なものであるわけです。同じ人間でも、この理性に生きることが価値あることになるわけです。ヨハネ福音書は、この対比を実にたくみに用いているではありませんか。肉 *sarks* はそのまま、しかし理性 *nous* の代りに霊 *pneuma* をおきました。そこで霊に生きることが永遠に生きることとなるわけです。しかし単なる言葉のおきかえではありませんでした。その前にキリスト教信仰では、その永遠なる言はキリストにあって肉化しているのであるという事をのべています。この永遠なるものとこの世とがキリストにおいて接するその点にこそ、真実の生命、光があるのであって、そこにおいてはじめて私達は、究極的なかわりをもつことが出来るのです。これを見おとすとニコデモの様に「どうしてそんなことがあり得ましょうか」と反問せざるを得なくなるわけです。ニコデモは、信仰のシムボルを充分理解し得ぬままにキリストの下を去ってしまいました。ヨハネ福音書記者は、このしるしの書において、キリストのどの業もすべて、キリストの完成せる業、栄光の業のしるし、シムボルとしてうけとっているといつてさしつかえないのです。

ヨハネ福音書記者は、このように巧妙にシムボルズムを用いながら、その当時の思想や宗教的伝統との相関性もあちながら、信仰の生命となっていたキリストの出来事との究極的なかわりを豊かに記したのだということが出来ま

す。
さて私達は次の問題にとりかかきましょう。それは「それではヨハネ福音書のシムボルズムはどのような特色をもっているか」という問題です。私達はこのヨハネ福音書がたくみにシムボルズムを用いて信仰の内容を示しているこ

とを学んできました。今その特色は何かという問を発すると、その背景として、丁度パウロが言った「ユダヤ人はしるしを請い、ギリシヤ人は知恵を求める。しかしわたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える」(コリント第一・一・二三、二四)という表現がそのままではまるようです。先程ものべましたように、一世紀後半から二世紀前半にかけて書かれたこの福音書は、多くの先の思想からの影響をうけたことは当然でした。とりわけラビのユダヤ主義とヘレニステイックなユダヤ主義の影響が強かったようです。^{*8}非常に一般的に言うと、前者はシムボリズムを通して、直接のしるしを求めていましたし、それにくらべ後者はしるしの知的理解を求めていたといえると思います。二つほどその実例をあげてみましょう。まず一〇章一—一八におけるよき羊飼のたとえ話です。ここでヨハネ福音書の特長は、「よき羊飼は門から入る者」(二節)であると同時に「羊の門」(七節)であるとしている点なのです。勿論このよき羊飼はイエス自身であることは申すまでもありません。そしてこの物語の詳細な点までもすべてイエスの業をシムボライズしていることは当然です。「わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている。それはちようど父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。そしてわたしは羊のために命を捨てるのである」(一四、一五節)。どの羊飼も同時に門となれないものです。しかしイエスは、同時に羊飼であり門でありました。これは、この記者がイエスこそ生命を与えるものであると同時に生命へと導く道でありたもうことを示しているに他なりません。このように考えてみますと、当時偶像崇拜でかなり一般化されつつあった神々が羊飼として少なからず登場してきていた事と、ヘレニステイックなユダヤ主義特にフイロによくみられるようなロゴスが宇宙の羊飼であるとしていた事に対する鋭い批判と、キリスト教信仰の深い理解とが、シムボリズムの中にあらわされているとみてさしつかえないと思えます。

もう一つの例は、シロアムの池の物語(九章)です。ここにも、光に関するシムボリズムが用いられています。盲人が、イエスからつばきでつくられた泥を目にぬってもらって、シロアムの池であらった目がみえたと書いてあり

ます。しかし注意してみると五節に、「わたしは、世の光である」とイエスに語らせています。しかも池の水で洗うということは、当然洗礼を意味しています。そして池の名前もシロアム、これは「送る」というヘブル語動詞の完了形・受身・分詞であって、「おくられた者」つまり「神からつかわれた者」つまりイエス・キリストであるわけです。こうなると問題は、単なる現象的変化としてのしるしでもなければ、理性的永遠性を示すものでもなく、キリストの出来事という歴史的事実が、その背後に無限のひろがりを与えているものであるという点にあることが分ります。現にこのシロアムの池の物語の決め手は、三九節「イエスは言われた。『わたしがこの世にきたのはさばくためである。すなわち、見えない人たちが見えるようになり、見える人たちが見えないようになるためである』」という所にあります。つまりイエス・キリストの出来事によって、この靈的な永遠のひろがりを見ることができるのであって、それを見ることの出来ぬ人は、たとい現象的に目が見えていたとしても、その人は盲目なのであるという意味をもっていきます。

以上のべてきましたことではっきりしてきたと思いますが、このヨハネ福音書のシムボリズムは、ユダヤ人の求めていたような歴史内での神の何か具体的な出来事を待つしるしでもなければ、ヘレニスティックなユダヤ主義が求めていたような何か抽象的なそして理性主義的なレベルでの何かかくされたしるしでもないのです。永遠がキリストにおいて肉化されたこと、つまり私達に真実の生命と光とを与えたもうキリストの光が具体化されておること、それがキリストの死と復活という歴史の出来事に示されたことがあらわされているのです。ヨハネ福音書の物語のすべてのしるしは、この偉大なクライマックスをさしめしめているのです。ですからこのシムボリズムは、何かかくされている幻のベールではありません。言が肉となったこの世界に、生き生きと生ける永遠性をしめしているというのが、ヨハネ福音書シムボリズムの特色といえるでしょう。

最後に考えたい点があります。「このヨハネ福音書シムボリズムの根本的内容は何か」ということです。この問題解明のために、もう一度この福音書の構造をおもいおこして下さい。この福音書は三部に分れ、第一部は一章で序文、第二部はしるしの書として二章から一二章まで、第三部は受難の書で一三章から二〇章まででした。第一部には主題がえがかれ、「言が肉体となった」がその中心でありました。第二部はしるしの書として、七つのエピソードから成立っています。今そのタイトルを考えてみますと、「新しいはじめ」「生命の言」「生命のパン」「光と生命」「光による審判」「死に勝つ生命の勝利」「死を通しての生命、十字架の意味」となり、この第二部で強調されていた用語は生命と光であることが容易に分ります。すると受難の書ではどうなっているでしょうか。ここに問題解明の糸口があります。非常におもしろいことには、受難の書では生命・光という語はあまり用いられないで、愛がひんばんに用いられています。単語の使用回数をしらべると次のようになります。

第二部

第三部

「生命」

五十回

六回

「光」

三二回

〇回

「愛」

六回

三一回

ここで私達は、この福音書シムボリズムの根本的内容が愛であるということに気付くわけです。この福音音記者は、この受難物語を神の意志の成就の時として理解しております。しるしの書でのべてきた生命と光の究極的な実在は愛の中に与えられているのであり、人が神を知り神の生命にあづかるというのも愛のわざに他なりません。この愛によって人間存在は、究極者との交りが可能なのであり、永遠の言葉に関与しうるのです。ここにシムボリズムの最高頂があるのではないのでしょうか。キリストの死と復活が終末論的な出来事として解釈され、そして初代教会の終末論的確信がここにのべられています。今このキリストの死と復活によって、いかなる人間存在も永遠につらなること

ができるという偉大な愛が示されているのです。新しい生命を得ることも光を見ることも、この愛のよろこびをもつことにその中心点があるのです。「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。……わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちに宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(一五・九―一一)のです。

キツテルの新約聖書辞典の「愛」の項に、ヨハネ福音書の特徴として、「ヨハネの愛は天的現実として上から下へ来る愛に他ならない。光と生命の世界がこの世に愛の形をもって突入してくる」とのべています。現在の一時的な世界や人生に対して、無限な愛のひろがりがあるキリストの出来事に満ちあふれているのではないでしょう。そして有限な存在である私達一人一人が、この愛のかかわりをもつときに、無限に魅了されて行くのではないでしょう。神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(三・一六)。この告白を心の底から告白できるときこそ、はじめてヨハネ福音書シムボリズムの真意を理解できることになるわけです。

附 記

ヨハネによる福音書概容

- A 序 文 1 : 1—51
1. 序 詞 (1 : 1—18)
2. 証 詞 (1 : 19—51)
- B しるしの書 2 : 1—12 : 50
- 第1話 新しいはじめ (2 : 1—4 : 42)
- 第2話 生命の言 (4 : 46—5 : 47)
- 第3話 生命のパン (6 : 1—71)
- 第4話 光と生命：証示と拒絶 (7 : 1—8 : 59)
- 第5話 光による審判 (9 : 1—10 : 21, 追補10 : 22—39)
- 第6話 死に勝つ生命の勝利 (11 : 1—53)
- 第7話 死を逆しての生命, 十字架の意味 (12 : 1—36)
- しるしの書の結語 (12 : 37—50)
- C 受難の書 13 : 1—20 : 31
1. 告別の説話 (13 : 1—17 : 26)
- a. 最初の劇的場面 (13 : 1—30)
- b. キリスト離別と再来に関する対話 (13 : 31—14 : 31)
- c. キリストと教会についての説話 (15 : 1—16 : 29)
- d. キリストの祈り (17 : 1—26)
2. 受難物語 (18 : 1—20 : 31)
- 補 遺 (21 : 1—25)

☆ ☆ ☆

- *1 Koehler-Baumgartner, *Lexicon in Veteris Testamenti Libros* (Leiden : E. J. Brill, 1958), pp. 368 f.
- *2 Paul Tillich, *Dynamics of Faith* (London : George Allen & Unwin Ltd, 1957), pp. 44 f.
- *3 Rudolf Otto, *Das Heilige* (Gotha : Leopold Klotz Verlag, 1929), pp. 13-30.
- *4 Paul Tillich, *op. cit.*, p. 48.

- *5 C.K.Barrett, *The Gospel According to St. John* (London: S.P.C.K., 1960), p. 28.
- *6 C.H. Dodd, *The Interpretation of the Fourth Gospel* (London: Cambridge University Press, 1953), pp. 10.
- *7 14頁の附記参照
- *8 C.H. Dodd, *op. cit.*, pp. 142f.
- *9 Gerhard Kittel, *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament* 1 Band (Stuttgart: W. Kohlhammer, 1933), p. 53.

Shigeru, Hiroshi

Symbolism in the Fourth Gospel

Résumé

Man's ultimate concern must be expressed symbolically, because symbolic language alone is able to express the ultimate. Having studied symbolism in the Fourth Gospel, we have raised three questions.

First, why did the author of the Gospel use symbolism? "Faith," Paul Tillich says, "is the acceptance of symbols that express our ultimate concern in terms of divine actions." Although the Fourth Evangelist stands within the general environment of primitive Christianity, he is well aware of the teaching of Rabbinic Judaism, Hellenistic Judaism as represented by Philo, and the Hermetic Literature. These religious traditions were his primary sources. The distinctive character of Johannine Christianity can be discerned by observing the author's transformation of basic ideas which he holds in common with other religious writers.

Second, what distinguishes the symbolism of the Fourth Gospel? In the Prophets, the sign, or significant act, is usually an indication of something about to happen in the working-out of God's purpose in history. In Hellenistic Judaism, the sign points to a hidden meaning, on an abstract, intellectual level. The Johannine sign is nearer to the prophetic; only it refers, in the first instance, to a timeless reality signified by the act in time. But every sign in the narrative points forward to the great climax. He writes in terms of a world in which phenomena—things and events—are a living and moving image of the eternal, and not a veil of illusion to hide it, a world in which the Word is made flesh.

Finally, what is the fundamental motive in Johannine symbolism? The key-word symbols in the early portion of the Gospel

(chs. 2-12) are life and light, whereas in the latter portion (chs. 13-20) the all-important word symbol is love. The Evangelist affirms the ultimate reality of life and light to be given in love. For the Evangelist, love is the principle of the world of Christ which is being built up in the cosmic crises of the present. Johannine love is love which God deigns to give to men, a heavenly reality which is ever descending into this world through love. Therefore the Evangelist not only can but must emphasize the active character of love, both in the life of Christ, and in that of the Christian.